



平成31年4月27日(土)

藤 棚

第368号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

語尾上げ言葉 語尾伸ばし言葉の低劣

校長 小川義男

昔、問答式授業の天才がいた。小学校高等科二年(現、中学二年)しか出ていないのに、その国語の授業は見事なものであったらしい。私は、十八歳で、中学校の英語教師になったのだが、その時の校長、教頭は、彼の授業を参観したことがあるとのことであった。授業の見事さに、高等師範や京大の教授までが弟子入りしたと言うから凄い。

もともと、この点は、弟子入りした学者達も凄かったと思う。そのあたりに、我が国初等教育が世界に伍して後れを取らない背景も存在していると思う。

しかし、この「問答式授業」は、うまく行かなかった。第一、六年生を過ぎると、生徒は沈黙しがちになる。中学生、高校生と、発育するに伴って一層顕著である。私は、芦田恵之助の存在は、その偉大さと共に我が国教育に弊害をもたらしたと考えている。

子供が、授業の中で積極的に意見を述べたがるのは、小学校四年までである。五年生になると、ぐっと発言しなくなる。社会性の芽生えでもあるのだろう。

だが、日本の初等教育では、無理矢理にでも発言中心の授業を展開しようとする。だから、研究授業などでは、「台本に基づいて」「見せる授業」を行う場合が少なくない。そのイニシアティブを取っているのは、若しかすると指導主事であるかも知れない。

「見せる授業」では、兎にも角にも発言の存在することが重視されるから、「ダカラー」、「モモタロウサンハー」などと、伸ばし言葉が、ふんだんに用いられるようになったのである。

学生運動が衰退していった時期のリーダーは、以前と比べると、質が落ちて行った。「ワレワレハー、アメリカテイコクシュギシャノー アクシツナインボーニタイシテー ダンコトシテー」と言った調子である。その演説は、聞いていて、こちらが恥ずかしくなるほど下手だった。

その頃からであろうか。一般の会話でも、語尾を伸ばしたり、語尾を上げたりする会話が目立つようになった。「語尾上げ言葉は、人々が自信を失っていく傾向と無縁ではなかったようである。意見を述べている筈なのに、語尾を上げて、相手にその正しいか否かを教えて貰おうとするかのような物の言い方をするのである。

この頃では、テレビに登場するようなタレントにさえ、この語尾上げ言葉が用いられるように

なった。流石に NHK のアナウンサーに、この種の傾向は絶対はない。もともと優秀な連中である上に、NHK 内部でも、徹底した指導が行われているのであろう。「さすが天下の NHK」である。

高校生も、狭山ヶ丘クラスになると、この種の語尾上げ、語尾伸ばし言葉はない。電車の中などで、ふんだんに「語尾上げ 語尾伸ばし言葉」を用いる高校生集団に接触することがあるが、ほぼそれは、その高等学校の社会的ランクに直結しているように思われる。政治家にも、この語尾上げ、語尾伸ばし言葉はほとんど見られない。流石に、修羅場を生きぬいてきた男達、女達である。

学者は必ずしもそうではない。もともと、学者も、一流の学者には、この語尾上げ、語尾伸ばし言葉は、見られないようである。

面接などで、この「語尾上げ」「語尾伸ばし」を用いれば、決して有利ではない。

但し、この「語尾伸ばし言葉」は演説などをする上では有利である。「従ってー」などと、引き延ばしているうちに、次の言葉を思いつきやすいからである。

長州人は、「あります言葉」を用いる。「そう思います」と言うよりは、「そう思うのであります」と言う方が、次の言葉を思い出すゆとりが生まれる。旧陸軍は、長州人の山県有朋が、全権力を掌握したので、陸軍全体に、この「あります言葉」を使用させた。当時、小学校でさえ、「ですます言葉」を用いれば怒鳴りつけられた位なのだから、「長州の横暴極まれり」と言うべきであらう。この種、長州の横暴は、無謀な戦争を始めた事に繋がっている。

但し、「あります言葉」はなかなか重宝である。私も、時折、これを用いる。

早稲田大学の創立者大隈重信は、生徒諸君が考えている以上に偉大な政治家であった。福沢諭吉が、その「崇拜者」だったと言う事からも、推察することが出来る。

彼は佐賀県人だから、あります言葉は用いない。演説もあまり上手ではない。しかし、あります言葉を用いるわけには行かない。そこで彼は、「アルンデアル言葉」を用いた。「我が輩は、そのように考えるのであるのである」と言った調子である。

私は大隈が大好きだし、早稲田には十年間在籍した。大隈の銅像近くのベンチで彼を見上げると、「現代にも、こんな大きな政治家がいたらなあ」と、しみじみ思った。

話が逸れたが、語尾伸ばし言葉、語尾上げ言葉は、何とかして乗り越えて行きたいものである。

イギリスでは、下町の英語は、全くといって良いほど聞き取れない。ケンブリッジ大学の近くには沢山の書店がある。そこには学者諸君が集まっているが、その会話は驚くほど美しく分かりやすい。考えてみれば、これがイギリスの「階級社会」と言うものなのかなあと考えさせられたりする。

生徒諸君も、自らの言葉に気品を保つということに、大きな関心を持ってもらいたい。語尾上げ、語尾伸ばしに、ジェスチャーを加えて面接試験に臨んだりしたら、それはもう、スタートから極めて不利だと覚悟しなければならない。

気品とは静かさの別名だと私は思うが、我が国には存在しなかった語尾上げ、語尾伸ばし言葉の流行は、民族が自信を失い、相手に依存して日々を暮らすようになった事の象徴ではないだろうか。

一流ホテルのレストランを訪れたとき、注意すると良い。声高に話す人、語尾上げ、語尾伸ばし言葉に出会うことは、極めて少ないのである。